

# 演習ガイダンス(2018年度)

2017年4月6日(金)16:50~18:35  
経済学研究科棟204演習室  
小野塚 知 二

## はじめに

### (1) 世界の大学卒業生の常識(と日本の大学卒業生の非常識)

#### ①歴史の有用性・戦略性をめぐる感覚(歴史を己の武器にする力)の決定的な相違

⇒今は過去の上に成立している。過去を参照しなければ新たな事態には徒手空拳で対応するしかない。

#### ②問いを発する力(と「愚かな問いを躊躇する「空気」感)の相違

⇒問いを発しなければ対話は発生しないし、いつまでも「上手」になれない(兼好『徒然草』第150段)。

#### ③「経済学(部)らしさ」の束縛からの解放

⇒経済学は一つの道具に過ぎないから、常識的・教科書的な経済学らしさに拘束される必要は全然ない。

### (2) 自分で課題を決めて、調べ、考え、結論を出すこと

「お勉強」(=既定の知識の効率的な吸収)と「研究」(=問題発見+課題設定+問題解決)の相違

### (3) 口頭発表および論文執筆の説得的な技法と能力

初等から高等までの日本の学校教育の最大の弱点の一つ。要するに相手に何を伝えたいか、相手から何を聞き出したいかということ。それに比べれば、英語力とか数学とは枝葉末節のいわば単なる手段の問題。

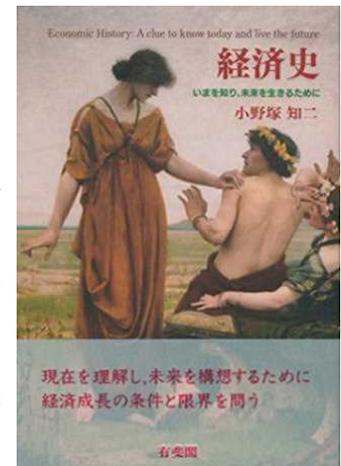
## 今年度のテーマについて

演習参加者募集要項154頁に記載されているとおりです。詳細は、開講後あらためて案内します。題目と趣旨は簡単には以下の通りです。

### 講義題目：経済成長の可能性と限界

**授業の目標・概要：**経済成長の可能性と限界について、歴史的な知見と方法を用い、また、諸学の知見を援用しながら、考察する。具体的には以下の4つを論点として、多面的な考究のための共同作業を行う。

(1)過去のさまざまな経済成長を可能にした条件を確定するとともに、前近代の経済の持続可能性と滅亡事例も参照しながら、経済成長の破綻する条件も抽出する。(2)また、近現代の産業発展・経済成長を成り立たせている人間的条件と自然的条件を確定して、それらの条件が現在、いかなる状況にあるのかを明らかにする。(3)今後の政策・戦略・方針を模索する際の前提として考慮しなければならない条件を確定する。(4)これら3点を踏まえて、物的な定常状態における経済成長の可能性について検討したり、人類の文明が破綻・滅亡にいたる可能性の有無と態様を調べることは、各自の研究課題として残す。



**授業計画：**導入部は講義で、解かれなければならない明晰な問題を設定する。その後、夏学期は、共通文献を読みながら、今年度のテーマについて考察を進める。また、今年度のテーマに関連した複数の課題について、諸種の参考文献を用いた小報告をしてもらうので、調べ、まとめ、発表し、討論する技法を磨いてほしい。共通文献と小報告の課題は、歴史学・経済学に限らず、人類学、民族学、考古学、生物学、地球物理学、社会学、法学、政治学などの諸領域に及ぶので、多様な方法と知見を駆使して、一つのテーマを追究する方法を身につけることが望まれる。冬学期の最初数回では、上記論点の(3)を確定したうえで、(4)についてグループ報告をしてもらう。そこが今年度の到達目標となる。

**授業の方法：**各自が個人研究をおもしろい卒業論文にまとめることを、本演習の最終目標とし、そのため

に、口頭で発表することと、学問的な文章を書くことを繰り返し指導し、訓練する。卒業論文の主題は、演習の今年度ないし来年度のテーマと関連づける必要は必ずしもない。

**教科書**：参加者と相談して決めるが、とりあえずの手掛かりとしては、以下のものを候補に考えている。

E. L. ジョーンズ『経済成長の世界史』名古屋大学出版会、2007年。

セルジュ・ラトゥーシュ『経済成長なき社会発展は可能か？』作品社、2010年。

ハーマン・ディリー『「定常経済」は可能だ!』岩波書店、2014年。

水野和夫『資本主義の終焉と歴史の危機』集英社、2014年。

吉川洋『人口と日本経済：長寿、イノベーション、経済成長』中公新書、2016年。

ダニエル・コーエン『経済成長という呪い』東洋経済新報社、2017年。

佐伯啓思『経済成長主義への訣別』新潮選書、2017年。

小野塚知二『経済史：いまを知り、未来を生きるために』有斐閣、2018年。

## ゼミと卒論について

せっかく進学しても、講義に出ているだけでは経済学部で自分が何を学んだのかは、卒業して半年もしないうちにほとんど忘れてしまうでしょう。ゼミで討論し、ご自分でテーマを決めて研究し、卒業論文に書いたことは、自分の財産としてあとまで残ります。卒業後に勉強の効果が残るかどうかという点だけでなく、就職活動の際にも自分でテーマを決めて研究しているということが非常に高く評価された例を最近いくつも耳にしています。経済学部や法学部のように多人数講義が主体の教育を行っているところでは、ゼミで個人研究を進め、卒論を書かなかつたら、大学で学んだ証しを残すのは非常に難しいのです\*1。

ぜひ、おもしろい卒論を執筆することを今後2年間の目標の一つに設定してください。そのために必要な助言と指導は必ずゼミで得られます。自力で何かを調べ、その成果を論理的に表現して、口頭で、また文章で発表するという技法は学生時代に身に付けておけば、どの進路を選んでも非常に役に立ちます。

ゼミについてのわたしの考えは、かつて、あるインタビューで詳細に述べましたので、参考にしてください\*2。

## 個人研究のテーマ選定について

個人研究のテーマは、演習のテーマに縛られる必要はありません。ご自分の関心のある、研究してみたいテーマを選んでください。ただ、テーマによって、研究のしやすさ／難しさが違います。卒論提出までの20ヶ月ほどで成果が出せないと困りますから、どんなテーマでも研究できるというわけではありません。テーマを選ぶ際は、まず、関心のあることながらいくつか候補として挙げて、ご相談ください。5月か6月のうちに、とりあえずのテーマを決めてください。その最初の研究成果を秋の合宿で発表してもらいます。

昨年度の卒論のテーマ、実際のゼミの雰囲気、合宿、調理実習等については新4年生の諸君に尋ねて下さい。

\*1 これは、東大経済学部卒業生のかなりの部分は東大法学部卒業生より優秀ではないかとわたしが考えている根拠で、伊賀泰代氏が『採用基準』（ダイヤモンド社、2012年）の第1章コラムで論じているのとは少し異なりますが、自力で何かを成し遂げる経験の有無という点では通底するところもあるでしょう。

\*2 「新しい大学選び」第3回(洋々・大学別キャンパスライフ、2009年3月) <http://you2.jp/ao/course-03.htm>